平成 23 年度 大学職員情報化研究講習会 ～応用コース～ 開催要項

http://www.juce.jp/kenshu/oyo2011/

主催：公益社団法人私立大学情報教育協会 大学職員情報化研究講習会運営委員会

開催趣旨

大学職員には、大学の直面する課題を認識し、その解決に必要な情報を収集・分析・評価し、解決策を提案・実行する情報活用能力と実行力、組織マネジメント能力が求められる。

本コースは、学士課程教育が直面する危機的状況を認識し、これを打開するために大学職員が担うべき職務を再認識し、課題解決に向けて力が発揮できるよう、ICT（情報コミュニケーション技術）の戦略的な活用、情報システム構築の課題、情報の取り扱い、持続可能な情報環境の在り方などを中心に研究討議する。

１．期待される成果

- 大学教育を取り巻く環境の変化について認識を深めるとともに、今まで気づかなかった自大学の現状や課題を発見する。
- これからの大学職員に求められる役割を大学の教育目標との関係から捉えなおし、大局的な視野でコーディネートやマネジメントに関わろうとする意識を獲得する。
- 大学の情報化を推進しようとする際に向き合わなければならない人的、組織的課題を認識するとともに、これを解決する上での視点を獲得する。
- ここで培った他大学職員との人的ネットワークを活用し、研究講習会終了後も自大学の課題解決にあたっての情報収集や意見交換を行う場を形成する。

２．参加対象者

- 私立大学・短期大学に所属する教職員（当協会への加盟・非加盟は問いません）
  －「基礎講習コース」への参加経験は問いません。
  －所属部署は限定しません。
  －中堅職員（採用後おおむね３年以上）を対象として、テーマに興味・関心のある方、自大学での課題解決のために情報収集を必要とする方（すべてのテーマにおいて教職協働が重要な課題であることから、教員の参加も可能です）
- 本研究講習会の開催内容に関連する当協会賛助会員企業の方

３．日程・会場

日程：平成 23 年 11 月 9 日(水)午後 0 時 45 分～11 日(金) 正午解散

会場：浜名湖ロイヤルホテル

（〒431-0101 静岡県浜松市西区雄踏町山崎 4396-1 ☎053-592-2222）

※ 本研修は合宿研修となります。参加者は全員上記ホテルへ宿泊いただきます。

※ 原則 1 部屋 2 名で、部屋割り当ては当方で行います。健康管理については十分ご留意ください。

※ 最寄り駅 JR 東海道本線「舞阪」駅（東海道新幹線「浜松」駅より約 5 分）より送迎バスを用意しております。

４．募集定員：１８０名

５．参加費： 加盟校・・・1 名につき 28,000 円 ／ 非加盟校・・・1 名につき 56,000 円

参加費の支払い方法は、「７．参加費の支払い」をご覧ください。その他に、宿泊費（2 泊 5 食付）として 27,500 円を 1 日目受付時に直接ホテルへお支払いください。

６．申込方法

各大学で参加希望をおとりまとめの上、**10 月 19 日(水)**までに、本研究講習会 Web サイトからお申込いただくか、本開催要項に添付の「参加申込書」にご記入いただき下記宛にＦＡＸ願います。参加申込者についての必要事項は必ず全員分記入してください。締切日を過ぎても定員に余裕があれば受け付けますので、お問い合わせ下さい。

７．参加費の支払い

参加費は、大学ごとに一括して11月2日(水)までに銀行振込によりお支払いください。

＜振込先＞　りそな銀行 市ヶ谷支店 普通預金口座
口座番号：００５４４０９
名 義 人：私情協
シジョウキョウ

※ お願い：振込名義に「oy23」の記号を追記願います。
※ キャンセルの場合は11月2日(水)までにご連絡いただければ振り込み手数料を差し引いた参加費を返金します。それ以降は、資料代等の実費を請求します。
※ 当日のキャンセルは、ホテルのキャンセル料が100%発生しますのでご了承願います。

８．プログラム概要

◆ 事前・事後コミュニケーション

10 月中旬から研究講習会前日まで、分科会ごとに事前の研修準備としてメーリングリストもしくはWebを利用して意見交換、ミニレポート、情報収集等を行います。これらの進め方については、参加申し込みされた方にメールで個別連絡差し上げます。

研究講習会終了後は、各分科会でレポートや最終成果物の作成、行動計画の起案等を行い、研修の成果を大学で活用できるようにメールでコミュニケーションを継続します。

◆ 全体会（初日午後0時45分～午後3時25分）

① イントロダクション

研修運営委員長より本コースの開催趣旨と大学を取り巻く様々な課題について解説を行い、研修を始めるにあたっての基本的な認識を共有します。

② 講義

研修運営委員より次の観点から解説を行い、情報活用戦略を構想・設計し、その運用と評価を担う大学職員のあるべき姿について考察します。

・情報を活用するとはどういうことなのか？
・情報を取り扱うことにおける課題とは？
・「戦略情報」が成功しないのはなぜか？
・「教育情報公開」という時代の要請に大学はどう応えるか？

③ 情勢研究「大学の情報公表」川嶋太津夫氏（神戸大学大学教育推進機構教授）

学校教育法及び大学設置基準等により教育研究活動等の状況を公表することが規定されています。しかし、日本の大学はその目的を認識しているのでしょうか。公表の基準がない中で大学間の相互比較はできるのでしょうか。ここでは、次の観点から教育情報の公表について考えてみます。

・中央教育審議会での議論の経過
・情報公表の現状（国立大学を中心に）
・情報公表のあるべき姿

④ 分科会オリエンテーション

分科会の進め方とディスカッションを活性化する「創造的技法」の解説など、分科会のオリエンテーションを行います。

◆ 分科会（初日午後3時45分～最終日正午）

全体会終了後、次の6つの分科会に分かれ、テーマ別研修を行います。いずれかひとつの分科会を選んでください。各分科会の概要は、次ページ以降をご覧下さい。

第１分科会	「ポートフォリオ」や「学生カルテ」などの学生情報を活用するためのＩＣＴマネジメント
第２分科会	教職協働で進める教育改善支援
第３分科会	大学の情報公表とＩＣＴの戦略的活用
第４分科会	大学図書館が取り組むべき学習支援・教育支援の探究
第５分科会	情報活用の重要性と情報システム部門の役割
第６分科会	教職員･学生間のコミュニケーションを活性化するICT活用戦略

分科会概要

第１分科会	「ポートフォリオ」や「学生カルテ」などの学生情報を活用するためのＩＣＴマネジメント

「学士力」を学生に確実に身につけさせるためには、教職員それぞれが専門性、組織的対応力を発揮し、連携・協働する中で学生の学びを支援し、指導や助言の質を保証する戦略が問われている。電子的な「ポートフォリオ」や「学生カルテ」などのシステムは、目的ではなく手段である。重要なことは、学生情報の活用を通じて現状の問題を整理・分析、共有し、学びの支援を組織的に整備・充実することである。

本分科会では、学生の個人情報を組織として統合的に活用する事例を踏まえ、ＩＣＴを用いた学習支援の在り方を考察する中で、学生一人々の質を保証する支援の仕組みづくりを探究する。

討議テーマ

- 「学習ポートフォリオ」活用の可能性と課題
  授業の到達目標に対する真の学びの成果を厳正に点検・評価し、自信がない点・できない点を明らかにするポートフォリオ構築の意義を確認する。その上で、学生に不足する能力を卒業までに補完するための組織的な学習支援の体制について探求する。
- 「学生カルテ」情報の具体化と組織的な活用戦略の策定
  一人々の学生を支援するため、学生の基本情報、成績・進路情報、相談・指導記録情報などの個人情報を教職員が総合的に共有する「学生カルテ」の内容について整理し、学生情報の一元管理のあり方、組織的な活用戦略について探求する。

獲得目標

- 「ポートフォリオ」や「学生カルテ」を構築する教育的意義について理解を深め、組織的課題と職員の役割を認識する。
- 自大学での対応について振り返りを行い、改善点を整理することができる。

想定される事例

- 学生自らの「Plan-Do-Check-Action」を促す「ポートフォリオ」の構築と運用
- きめ細かな個別支援を展開するための「学生カルテ」の構築と運用

参考：昨年度の討議の様子

事例研究、グループ討議、成果発表という一連の流れを通じて「ポートフォリオ」と「学生カルテ」の特性が徐々に明らかになり、研修会終了時点で参加者全員がそれぞれの教育的意義を識別的に認識することができた。あわせて、これらのツールを活用して学生の学びを支援するには、個々の教職員が専門性を発揮するとともに、組織的に連携・協働することが重要であるという認識を深めることができた。

６つのグループが導き出した結論には、次のような本質的な観点が盛り込まれていた。例えば、建学の精神や教育目標との関係、学生の学びや成長を評価する規準の確立、取組の活性化を図るための組織的体制、教職員の意識変革と協働の促進、費用対効果の追求、個人情報の保護などである。参加者は、戦略的な学生支援モデルを創出するプロセスを通じて、課題解決に必要な視点を獲得するとともに人材育成支援、教育支援に果たすべき職員の役割について自覚を高めることができた。

★ **昨年度の報告書･･･** http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g1.html

第２分科会	教職協働で進める教育改善支援

教育改善の実現には、教員の努力に負うところが大であるが、組織的に進めていくためには教員と職員が協働して組織的に取り組むことが求められている。例えば、ICT を活用した初年次教育、キャリア形成支援教育、双方向型授業、大学間・産学連携授業などへの対応、また、教育改善に向けた提案・実施・評価・改善への対応に、教員と職員が一体となった取り組みが必要である。

本分科会では、「教職協働で進める教育改善支援」とは何かについて、上記の取組を題材にその具体像を議論し、ICT を活用した教育改善戦略とその期待される効果、推進する際の課題について検討する。

討議テーマ

- 教育改善の課題認識
  教育の実態を把握し、課題を明らかにして解決の方向性や職員に求められる役割について考える。
- 教育改善に役立つ情報の創出
  教育改善の課題を解決するために、様々な教育関連情報の組合せを可能にするデータベース等の仕組みを探求する。
- 実践的な教育改善モデルの構想
  組織体制や職員の役割等を視野に入れ、課題解決に向けた ICT 活用の方略を探究し、実践的な教育改善モデルを構想する。

獲得目標

- 教育改善モデルの構想を通じて、教職協働で進める教育支援の具体的なイメージや意義を理解する。
- 自大学において教育改善支援を展開する際の課題を明らかにする。
- 教育改善の視点からＩＣＴ活用の有効性と課題を認識する。

想定される事例

- 教育の質向上を図るために機関レベルで情報を分析・調査する事例

参考：昨年度の討議の様子

事前研修での意見交換や、職員による教育支援の取組みの事例紹介を受け、教職協働という視点から職員として何ができるかを考える動機付けができた。職員が教育現場に踏み込むことの難しさ、職員力の底上げといった職員教育、学生への学びの促しなど活発な討議の結果、「授業評価のＰＤＣＡを中心にした授業支援モデル」や「学生サービス向上にむけた教職協働の組織改革モデル」が仕上がり、教職協働における職員が果たすべき役割についての意欲的なモデルが完成した。

参加者の自己評価では、「教職協働における職員としての気づきや新たな発見があった」など、多くの参加者が分科会の目標を達成できたとの回答があり、提示されたアクションプランには、「自大学での教育支援体制の改善や構築など様々な取組みを行っていく」との意欲的な姿勢が認められた。

★ **昨年度の報告書･･･** http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g2.html

第３分科会	大学の情報公表とＩＣＴの戦略的活用

本年４月より大学設置基準において大学の教育情報の公表が義務化･努力義務化された。その意味するところは、大学が負託されている人材育成について、大学での取り組みを外から見えるようにする、分かるようにすることを通じて志願者、在学生、父兄、国・社会に対して大学としての役割と責任を明らかにすることにある。

それには、義務として捉えるのではなく、自ら社会的責任をどのように果たそうとしているのか、教育の質的向上に努めている取り組みや健全な経営の財務情報を主体的に発信していくことが求められている。

本分科会では、教育の情報公表の意義について理解を共有した上で、公表の範囲・内容・方法及び教育情報の点検・分析を組織的に行うための体制づくりなどについて、ＩＣＴを用いた情報戦略を探究する。

討議テーマ

- 情報公表の意義を確認する。
  大学は誰のためのものかという視点から､多様なステークホルダーに向けた最適な教育情報の公表及び財務情報の公開について真の狙いを確認する。
- 公表すべき教育情報の内容を探る。
  社会的な責任を果たすために、定型的な情報ではなく、教育活動の方針・実態・今後の課題が見えるようにするための情報内容について意識合わせする。
- 情報を収集・分析・統合管理するための組織的な取り組みを理解する。
  大学の特色化・個性化を高める教育活動とは何か、教育活動での弱みは何かを組織的に点検・分析する体制を米国大学の事例を参考に学習する。
- ICT を用いた情報戦略を探る。
  高校生向け、在学生向け、父兄向け、社会に向けた情報公表の戦略や、留学生獲得に向けた取り組みなどについても議論する。

獲得目標

- 討議を通じて得られた情報公表の意義やあり方を明らかにし、自大学における情報公表の考え方、方法・内容についての再確認を行う。
- 学内外に散在する多様なデータを「情報」として戦略的に利用する学内組織を整備する必要性を認識させる。

想定される事例

- 大学の社会的責任（ＵＳＲ）を含む多様な教育研究活動、広報活動についての多様なスキームや先進的なＩＣＴを活用した情報公表の取り組み。

参考：昨年度の討議の様子

分科会の討議では､『各大学の情報公表への対応、進捗状況を共有』､『情報公表の背景と目的、公表の対象となる項目や公表の対象となるステークホルダーの確認』､『各大学における情報公表の現状の整理と課題の発見、公表にあたっての留意点の検討』､『重点課題の抽出』､『ICT を活用した情報公表の課題解決方法の検討』を探ることを目指して終日討議が進められた。

最終日は、「討議テーマ」「獲得目標」に沿った内容での成果発表を行い、研修成果を参加者全員で共有した。研修後のアンケートでは、「多角的な視点から問題解決の糸口を検討できた」､「ステークホルダーのニーズにあった参加型の情報発信が必要である」､「この研修成果を学内へフィードバックしたい」､「大学情報化の次の一手が必要である」など、短期間ではあるが今回の研修を機に積極的な業務改善に活かそうという意欲的な姿勢を伺うことができた。

★ **昨年度の報告書･･･** http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g3.html

第４分科会	大学図書館が取り組むべき学習支援・教育支援の探究

学生に主体的、自立的な学びを身に付けることが喫緊の課題となっており、その解決に向けて専門性を有する図書館に多くの役割が期待される。図書館職員が教員や他部局と連携しながら学生に基礎的な学習技法を身に付けさせるなど、学習支援活動の一翼を担うことが期待されている。また、教員のニーズを把握し、教育コンテンツのアーカイブ化やデータベース化、情報提供元との交渉による電子教材の整備や共同開発を行うなど、ICT の観点から教育支援活動に関与することが不可避となってくる。これまでの図書館業務について管理重視の業務から、自立学習を支援する業務と教材整備を支援する業務に転換していくことが期待されている。

本分科会では、図書館が教員及び他部局と連携して行う学習支援、教育支援の可能性を考察する中で、自大学における問題抽出と課題解決にあたって備えるべき視点を獲得することを目指す。

討議テーマ

- 図書館が担うべき学習支援を確認する。
  初年次教育の課題である学習技法の取り組みに向け、図書館としてどの様な役割を担うべきか省察し、具体的な学習支援の範囲・内容について意識合わせする。
- 電子書籍を活用した新たな教育支援の在り方を考える。
  電子書籍の適用範囲が広がってきた。これを利用した共同学習モデルの構想なども提案され新たな可能性も見えてきた。大学が保有する教材の電子書籍化について、実現に向けた課題と可能性を検討する。
- 他部局や教員と連携した組織的な学習支援体制を考える。
  教育支援・学習支援の発展的な提案を行うために、教員や他部局との連携の在り方を考える。

獲得目標

- 学習支援に立脚した図書館サービスを具体的にイメージすることができる。
- 教育支援として電子教材を整備・充実することの重要性を認識し、図書館として果たすべき役割を考えることができる。
- 自大学における問題抽出と、課題解決に向けた図書館の役割と責任について認識できる。

想定される事例

- 既存の図書館システムに ICT 技術を装備することによって学生参加型の学習支援を実現した大学の事例
- 教育コンテンツのデータベース化や電子教材の整備によって教員と協働で授業づくりに参画している図書館員の事例

参考：昨年度の討議の様子

学生を主体的、自立的な学び手へと転換させるために、図書館がどのようにして学生の学びを支援すべきか、一方で、人や予算の厳しい業務環境で図書館はいかなる工夫で従来の枠を越えた新しい発想を採り入れ改革を進めるべきか、参加者全員で徹底した議論を進めた。具体的には次のような提案が行われた。

- 大学における出口を見据えた学習支援～学生が自ら学ぶ力を育てるために図書館ができること
- すべての学生が利用したくなる魅力的な学習支援プログラムの在り方～新たな学習支援の場をめざして
- 問題解決できる学生を育成する図書館のあり方

★ **昨年度の報告書･･･** http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g4.html

第５分科会	情報活用の重要性と情報システム部門の役割

情報システムの最適な環境なくして、大学の教育・研究・管理運営の活動は機能しない。情報システム部門は、大学の使命・課題、取り巻く環境の変化を的確に把握し、その整備により、大学の使命遂行や課題解決に貢献することが求められている。その課題として、例えば、経済的・人的負担の軽減に効果的と言われるクラウドコンピューティングの導入問題、災害に備えた情報システムの再構築、情報資産を守るためのセキュリティ対策、高機能携帯端末等の利用に対応した情報システム、情報投資に対する費用対効果の検証、投資効果を踏まえた情報システムの基準作り等があげられる。

本分科会では、以上のような課題を確認する中で情報システム部門としての役割と責任について省察し、真に大学の使命に応えられる情報環境の在り方について人的・物的・財政的な観点から経営戦略について探究する。

討議テーマ

グループ編成し、「情報システム部門に今求められること」を想定したテーマを設定し、下記の検討項目を必須とした情報戦略の構想・提案をする。

- 情報システム部門の役割の変化
  大学を取り巻く外部環境の変化と学内から情報システム部門に求められる内容について分析を行い、役割の変化を認識する。
- 新しい情報技術の導入による効果とリスクの評価
  クラウド・コンピューティングや仮想サーバの利用、外部データセンターの活用、ソーシャルメディアツール等についての評価を行う。
- 情報資産管理運用のあり方
  大学における情報資産の認識および洗い出し及び守るべき情報と活用すべき情報について点検評価を行う。
- 非常時における情報システム部門の心がけやその対応
  ICT の特性を活かした平常時・非常時の心がけと対応策を検討する。

獲得目標

- 大学の使命、大学を取り巻く環境変化を踏まえて、自大学の情報システム部門の役割の変化を認識する。
- 新しい情報技術の導入による効果とリスクを認識する。
- マネジメントの視点から、情報システムやその投資について構想をまとめ、説明責任を果たせるようにする。

想定される事例

- 情報セキュリティの自己点検事例
- 新しい情報技術を利用した事例
- 情報システムの対災害リスク管理への取り組み事例

参考：昨年度の討議の様子

「情報資産管理運用のあり方」、「高度化する教育研究をいかに支援するか」、「安定した利用環境の提供」の検討テーマで３グループに分け、討議を行った(参加者 22 名)。

事前研修として、参加者には「情報システム部門の職責に関する考え」や「自大学が抱える ICT 的な課題」を事前レポートを課し、自己及び自学の紹介にこれらを交えることにより、課題の共有を図った。

本研修のグループ討議においては、上記の３グループともテーマの掘り下げ、課題の洗い出しや整理を行い、最終的に「情報資産管理運用のあり方　～学内のデータバンクを目指して～」、「ユーザ目線に立ったサービス提供のための理想的な教育支援のあり方～コミュニケーションの観点から～」、「“安定した利用環境の提供”とは？」といったテーマでの検討成果を発表していただいた。

成果として、創造的技法等を意識した結果、時間内にある程度意見の集約ができており、本分科会の目標である大学情報部門としての従来の視点・軸足から、これからの大学情報部門としての視点・軸足について、十分検討し、参加者への気づきやモチベーション向上を図られたかと考える。

★ 昨年度の報告書･･･ http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g5.html

第６分科会	教職員･学生間のコミュニケーションを活性化する ICT 活用戦略

授業についていけない、自ら学びに入れない、誰にも相談できない、友達をつくれないなど、キャンパス内で孤立し、不安を抱える学生が増加してきている。その結果として、中途退学者が顕著になってきており、経営面でも深刻な問題となっている。

大学は入学した学生一人々に対する責任を持った人材育成を使命とすることから、学生とのコミュニケーションの機会を多面的かつ重層的に設け、親身になって不安を取り除く努力が求められてきている。

本分科会では、教育・学習支援、キャリア形成支援、学生生活支援に不可欠な学生・教職員相互のコミュニケーション機能を高めるために、ICT 活用の可能性を確認し、取り組むべき課題及び実践的な戦略を探究する。

討議テーマ

例えば、次のような観点からコミュニケーションツールを活用した学習支援、キャリア形成支援、学生生活支援の戦略的モデルを構想する。

- ともだちづくり、メンタルケア、学習障害への支援
- 学生の不安や悩みの把握と解消
- 中途退学者を抑止する SNS やポータル
- オフィスアワーやピアサポート（学生相互の教え合いや学生による学び支援）の活性化
- 入学前や卒業後のコミュニティ形成
- 多様な映像情報を活用した学習支援や学生生活支援
- 大規模震災等、緊急時のコミュニケーションを保障する体制

獲得目標

- コミュニケーションツール活用の基本的な考え方､可能性とその限界について理解する。
- 学生支援体制を強化するための組織的な「教職員の役割・関わり方」を認識する。
- 実践的な学生支援モデルの要件を具体化することができる。
- 自大学における課題認識と課題解決の方策を検討するための視点を獲得する。

想定される事例

- 学生同士のつながりを強化するコミュニケーションツール
- 自ら学びに入れない学生を支援し、中途退学者を抑止・支援する SNS 活用
- 授業中の理解度確認に活用できるコミュニケーションツール

参考：昨年度の討議の様子

３つのグループに分かれ、教職員・学生相互のコミュニケーションを活発化して学生支援の豊かな展開を目指す ICT 活用戦略を構想した。

例えば、「向き合える、支え合える、あったかキャンパスへ向けて」をビジョンに掲げ、「困っている学生をいかに救い上げるか？」を検討するグループ、あるいは「学生のコミュニケーション能力を向上するプログラム」や「離脱防止のために、問題を抱える学生を早期に発見するプログラム」を検討するグループがあった。

いずれも、情報ツールをどのように適用するかという方法論にとどまることなく、学生自身に自己解決を促しながら大学として組織的にフォローする仕組みを提案するなど、目的達成のための組織的、実践的な情報活用モデルを追求した。また、モデルの有効性を検証する評価システムの検討を経て、学生を多面的にサポートする体制づくりについて理解を深め、より実践に役立つ成果を得ることができた。

★ **昨年度の報告書･･･** http://www.juce.jp/kenshu/oyo2010reports/g6.html

参考：平成 22 年度 参加者の声
～ アンケートより一部抜粋 ～

・具体的な導入事例が非常に参考になった。また、学生のインセンティブとして、ポートフォリオを卒業時に配布するアイデアは非常に有効だと思う。(30 代・第 1 分科会参加)

・今回得たものをどこまで具体的に落とし込み、発展させていけるか、自大学に戻って様々な人と議論してニーズを見極める必要がある。(30 代・第 1 分科会参加)

・職員が一歩踏み出して改革していかなくてはならないという使命感を得た。そのために大学の理念、現状、ゴールを常に確認しておく必要がある。(30 代・第 1 分科会参加)

・全国に新しい人的ネットワークを作ることができた。通常の仕事の場面では、利害関係もあり、なかなかできないような関係を作ることができ、満足している。(30 代・第 1 分科会参加)

・真新しいことではなく、今まで行ってきたことや現在行っている取組みなどに対して視点を変えることによって相互理解を深めるなど、地道な活動から始めることが重要であると認識した。(30 代・第 2 分科会参加)

・自学の教員と職員の協働に関する課題や今後の取り組み方について方向性が見えてきた。改善点のみならず、自学の恵まれた点も認識することができ、実り多い研修となった。(40 代・第 2 分科会参加)

・他大学の取組みや企業の事例発表から自大学の取組みに対する遅さがわかり、帰ってから早急に取組まなければならない課題が多く発見できた。(30 代・第 3 分科会参加)

・情報公表を通じて、縦割が目立つ大学に横糸を通したいと考える。そのためにも、広報部門の特長を生かして組織内と関係を築きたい。(20 代・第 3 分科会参加)

・一方的にデータを載せるだけでなく、見る側にとってわかりやすく、また共感を得られるような情報の公表が必要だと考えた。(40 代・第 3 分科会参加)

・他大学との情報交換、情報共有、及び図書館や大学をとりまく環境、状況へ変化していることなど、学内外の情報チェックを行い、先を見通す力をもっと養いたい。図書館及び大学が変革できるような検討・取組みを推進していきたい。(40 代・第 4 分科会参加)

・「図書館として」ということに固執せず、新たな学習支援の場として、すべての学生の通りみちになればと思う。全学的なプログラムに図書館が関わっていこうとした時に、図書館員としての力、大学職員としての視点で向き合う力がなければいけないと感じた。(20 代・第 4 分科会参加)

・法人まで話を通すなど、これまであまり意識してこなかった部分があることに気づいた。結論がこうだという正解に行き着かないかもしれないが、情報部門のあり方を考えること自体が大事だと分かった、今まで考えていなかった。(20 代・第 5 分科会)

・大学改革の必要性はどの職員も感じていると思うが、具体的に誰がイニシアチブをとってやっていくのかという点を明確にし、学内で承認を得る必要があると感じた。自分が変わることで相手も変わると思う。(30 代・第 5 分科会参加)

・大学情報化の推進は情報システム部門のみで達成できるものではなく、利用者や経営層を巻き込んでいく必要があることを学んだ。(40 代・第 5 分科会参加)

・課題について大局的な視点でとらえ、自由な発想で検討し、現実的に解決していくための手段を講じていくことが大切だと、この研修会で強く感じた。自分の視野が狭く、硬直していたことに気づいた。この気づきを業務への姿勢に生かしたいと思う。(50 代・第 6 分科会参加)

・分科会では、ほぼゼロベースで制約をほとんど意識しない戦略を議論した。しかし、実際は部署間連携、費用、設備等の制約が生じる。今回の研修で得た戦略を自大学の状況と合わせて出来る事から始めたいと感じている。まずは、コミュニケーション活性化の必要性や、きっかけを大学が提供する必要性などから考えて提案できればいいと考える。(20 代・第 6 分科会参加)

平成 23 年度 大学職員情報化研究講習会～応用コース～ タイムテーブル

1日目

12:00	受付
12:45	開会・イントロダクション
13:15	講義
14:05	休憩
14:15	情勢研究
15:05	分科会オリエンテーション
15:25	事務連絡・移動・休憩
15:45	分科会
17:30	チェックイン・休憩
18:30	夕食・懇親会
20:00	フリーディスカッション
21:00	

2日目

9:00	分科会
10:20	休憩（適宜）
10:40	（引き続き分科会）
12:00	昼食
13:00	（引き続き分科会）
14:50	休憩（適宜）
15:10	（引き続き分科会）
17:00	休憩
18:00	夕食
	ディスカッション

3日目

9:00	分科会
10:20	休憩（適宜）
10:40	（引き続き分科会） 討議まとめ アンケート記入
12:00	順次解散

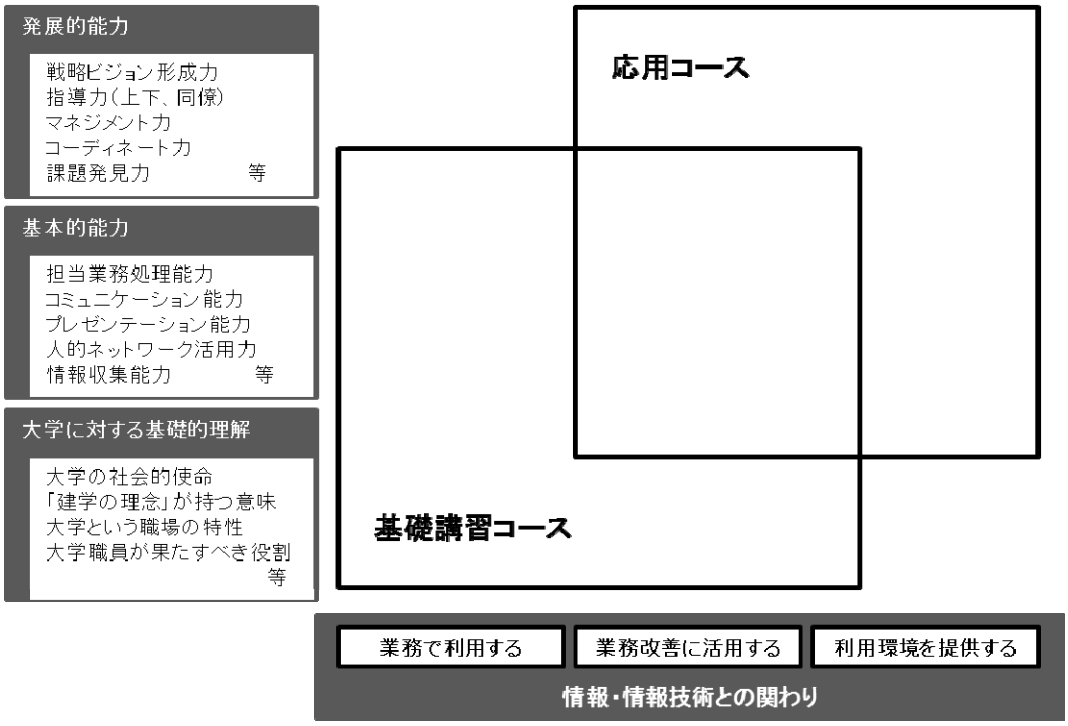
※都合により変更する場合があります。

私立大学情報教育協会　大学職員情報化研究講習会について

本研究講習会では、「情報」の持つ意味と可能性ならびに活用にあたって留意すべき点を理解するとともに、大学の課題を解決するための「情報活用戦略」について考え、行動できる職員を養成するため、次の２つのコースを用意しています。

【参加対象】

基礎講習コース（7月開催）	応用コース（11月開催）
✓所属部署は限定しません。 ✓新人や他業種からの転職者には大学という職場や職員の役割を学び、中堅層や管理職には自大学、自己の職場、自己の役割を振り返り、情報活用とそれによる問題解決についての研修機会を提供します。	✓「基礎講習コース」への参加経験は問いません。 ✓所属部署は限定しません。 ✓中堅職員（採用後おおむね３年以上）を対象として、テーマに興味・関心のある方、自大学での課題解決のために情報収集を必要とする方などを対象とします。（すべてのテーマにおいて教職協働が重要な課題であることから、教員の参加も可能です。）



本年度の基礎講習コースは次の日程で開催しました。参加者は情報活用の重要性を理解し、その活用による問題解決能力を高めることができました。

◆基礎講習コース

日程：平成 23 年 7 月 7 日(水)～9 日(金)

会場：浜名湖ロイヤルホテル（静岡県浜松市）

成果：大学の使命、大学職員に求められる基本的な役割と能力（職員力）、情報を活用することの重要性について認識を深めるとともに、大学が抱える問題の解決に向け ICT を活用した工夫についてグループラーニングを行い、成果の発表・講評を通じて課題認識・解決への取り組みプロセスを身に付けること等を狙いとして、全体会（イントロダクションと２件の講義）とグループ討議の構成で実施した。グループ討議では、8 名を 1 グループとして大学が抱える課題を選定し、情報を活用した課題解決の方策を検討した。主体的、積極的な討議参加により、目的（ビジョン）を明確化するプロセスを経て、解決策と情報の活用について成果をまとめた。加盟校・非加盟校合わせて 82 の大学・短期大学から 180 名、在職年数別では３年以下が 77%、年齢別では 20 代が 69%を占め、学事・教務、情報、総務、図書館等、全分野からの参加があった。講習会全体を通じて、参加者は職員力について理解を深め、大学職員としての意識変革が図られたと考える。